

## 解題

月村辰雄

エコール・ノルマル・シュペリウール副校長・図書館長ピエール・ブチマンジャン氏は、田村毅教授の主宰する日本学術振興会「マルチメディア通信システムにおける多国語処理研究プロジェクト」の招聘研究者として 1998 年 4 月 13 日に来日され、約三週間にわたる滞在の間、各種の貴重な研究協力活動のかたわら、東京大学、東京日仏会館、京都大学で学術講演を行われた。ここに掲載するのは、「ヨーロッパにおけるラテン語写本の伝承」と題して 4 月 20 日に東京大学文学部で行われた講演の全文である。

ブチマンジャン氏は 1936 年のお生まれ。エコール・ノルマル・シュペリウールに在学され、lettres classiques のアグレガシオンを取得なさった後、1964 年から同校の図書館長の要職にある。

教室と図書館と学生寮とからなる同校は、たとえば中世のソルボンヌ学寮以来のコレージュの伝統を受け継いだ構造を呈しているが、中心はあくまで二階部分のほぼすべてを占める広大な開架式の図書館にある。ユルム街の正面玄関をくぐり、静かな中庭を回り、重い扉を開けてその内部に入った人なら、蔵書の迫力に圧倒されることであろう。19 世紀の初め以来、ノルマリアンたちが青春の日々を閉じこもり、アグレガシオンの受験準備と学位論文の執筆に没頭し、いってみるならフランスの近代的文科系諸学を形成することになったのは、まさにこの場所なのである。

たしかに蔵書量は、リシュリユー街の国立図書館に較べるべくもない。しかし、固有の分類法によって書誌、歴史学、地理学、文学、言語学、哲学、神学と区分された書棚から書棚を仔細に眺めてゆくと、いわゆる好事家好みの奇書・珍書のたぐいがいっさい含まれていないことに気づくであろう。これは、アグレガシオンの受験準備と学位論文の基礎資料という二つの目的のために、フランスでもっとも完璧に集められ、もっとも効果的に配列された蔵書なのである。新旧を問わず、名高い基本文献の果て知れぬ列の中を歩きまわると、図書選択についての、ある強靱な意志の力のようなものさえ伝わって来る。

数年で職が変わる素人司書が標題だけを頼りに気まぐれで選んだのでは、とてもこのような図書館はできない。前世紀以来、エコール・ノルマル・シ

ユペリウールでは、これと見込んだ学者を若くして館長に据え、図書館を託してきたのである。図書館長は、以後、数十年の長きにわたって、ノルマリアンの必要とする全分野について図書の選択と蒐集の責任を負う。だから同校の蔵書は、歴代でもまだ十人に満たない図書館長たちの作品、といっても過言ではないのだ。学識と天分に裏打ちされない限りは図書を集めることはできない、というか、図書をあつめることがそれ自体で学問である。そうした古代アレクサンドリア図書館以来の伝統が同校には確実に脈打っている。

その伝統を支えるプチマンジャン氏は、館長としての業務のかたわら、ご自身ではどのような研究を進めておられるのか。さいわい手元には長大な氏の業績リストがあるが、研究分野は、1) 教父の著作・中世聖人伝・ラテン語聖書など、宗教関係文献の写本・印刷本による伝承の問題と、2) 古典学研究史、ならびに図書館史の二つに大別できるように思われる。

第一の分野では、反宗教改革時代に出版された教父の著作についての書誌学的研究が、氏の出発点であった。ついで氏の関心はテルトゥリアヌスとキプリアヌスという二人の教父の上に集まり、彼らの著作を載せる個々の古写本の伝承の問題についての論考を、*Revue des Etudes Latines*, *Revue des Etudes Augustiniennes*, *Revue d'Histoire des Textes* などの専門誌に発表されている。中世聖人伝については、特にディオクレティアヌス帝に迫害されたアンティオキアの伝説的な聖女ペラギアの各種の聖人伝を研究され、その伝承の変容という問題を取り扱っておられる。また、ラテン語聖書研究の方面では、1980年代の半ばに Beauchesne 社から出版された八巻本の聖書史の中に、「*Les plus anciens manuscrits de la Bible latine*», 「*La Bible à travers les inventaires de bibliothèques médiévales*」といった論文をお書きになっている。

第二の分野では、その柱となるのはやはりルネサンス期のユマニスト、ベアートゥス・レナヌス研究であろう。レナヌスはテルトゥリアヌス著作集も刊行しているが、プチマンジャン氏はその刊本研究から出発され、当時レナヌスが依拠した古写本の確定の問題を取り扱い、さらには、レナヌスの蒐集した16世紀初めの印刷本を集めたセレスト市図書館の蔵書研究に向かわれている。この延長線上に、氏の業務と密接に関わる書物史・図書館史研究が位置することはいうまでもない。「古典刊行者としてのエラスムス」「教父著作刊行者としてのミーニュ」「すかしを手がかりとした紙製写本の年代決定」「16世紀初頭のバーゼルにおける出版形態」――主な論文の題名を列挙するだけでも興味深い。Promodis から四冊本で刊行された浩瀚なフランス図書館史 *Histoire des bibliothèques françaises* の中にも「*Les bibliothèques*

et la transmission des textes »をはじめとする論文をお書きになっている。

こうしてみると、「ヨーロッパにおけるラテン語写本の伝承」と題された東京大学におけるプチマンジャン氏の講演が、どれほど広い範囲にわたって氏ご自身の長年の研究成果の上に立脚しているか、容易に理解できる。それはほとんど大盤振舞といってもいいほど、貴重なデータを随所に紹介しながら、古典古代のラテン語著作の写本がどのように中世を経てルネサンス期の印刷本に引き継がれ、現代にまで伝承されたのかを明らかにしている。

読みどころは、まず第一に、九世紀、新しいカロリング小文字書体の一般化の結果、古典古代から伝わった写本がその書体で書き写される必要が生じた事態の指摘であろう。私は、氏の指摘ほどの確に、この新書体の出現と写本の伝承とを関連付けて論じた例を知らない。こうして新しく書き写された写本がその後の伝承の原点に据え付けられるわけだが、氏はさらに「カロリング期に存在したはずの、その後の伝承の元となる写本について、その一つ一つを同定し、かつての所在地を確認する」という、今後の研究の向かうべき壮大な道筋を提示し、かつ、すでに明らかとなっているいくつかの具体例を挙げている。

また、第二の読みどころは、中世の書物探索法であろう。知人に問い合わせを出す、僅かながら存在する文献ガイドを参照する、みずから各地の図書館を実地に検分する。この三種の方法を区分した上で、それぞれについて興味深い実例が語られる。さらに、目指す書物が見つかった場合、いかにそれを筆写するか、さらにはシトー会のようにこの分野でよく組織された修道会の内部では、どのように書物を流布させたのか。発見——筆写——流布、という実際のプロセスに添って具体例が述べられてゆくので、読者はあたかも中世の書物愛好家と同様の興味を掻き立てられることになる。

最後の読みどころは、印刷本の出現以降における写本の危機である。いわば用済みとなった写本は、さまざまな機会に消滅していった。それが、プチマンジャン氏の講演では、ベアトウス・レナヌスという古典刊行者、フェリペ二世という蒐集家、最後に、あるモジュエールという投機的書籍商という三つの場合に分けられて興味深く語られてゆく。

これがまさに、日本ではあまり馴染みのない文献学（philologie）という学問なのである。テキストは、偶然にせよ恣意的な操作に拠るにせよ、伝承の過程でかならず変容を蒙る。従って、テキストは初めに書き記された時の状態に復元されねばならず、そのためにはその伝承経路をできうる限り具体的に明らかにして、一步一步原初の状態に遡らねばならない。テキスト解釈

は、その原初の状態を復元した時点でようやくスタートの許される操作なのではないか。

日本においては、ヨーロッパ近代諸国語文学は原則としてラテン語作品を研究対象とはしない。また、古典文学研究は、古典古代のテキストと 19 世紀後半以降の近代古典学の研究成果しか取り扱わない。そのため、古代末期からルネサンス、いやフランスでいえば革命期まで、知の世界の主要な関心事であったラテン語の著作とその伝承の問題は、どの専門分野からも閉め出され、研究対象とはならなかった。この問題の重要性と、またそれを研究する醍醐味とを、プチマンジャン氏の講演は訴えているわけであり、その意味で貴重である。

なお、この講演は翻訳された上、岩波書店刊行の『文学』1999 年春号に掲載予定である。